

第六章 紫の上の物語 出家願望と発病

[第一段 源氏、紫の上と語る]

院は、対へ渡りたまひぬ(殿は東の対へお帰りになりました)。上は、止まりたまひて(紫の上は寝殿にお残りなさって)、宮に御物語など聞こえたまひて(宮に朱雀院や帝のご機嫌などを伺ったり申しなさって)、暁にぞ渡りたまへる(夜明け間際に対にお戻りなさいました)。日高うなるまで大殿籠れり(そして昼近くまでお休みになりました)。

「宮の御琴の音は、いと*うるさく*なりにけりな(宮の御琴の音はとても熟練したものになって来たな)。いかが聞きたまひし(如何お聞きになりましたか)」 *「うるさし」はくうるさい>で、今でもくわずらわしい>とく造詣が深い>との意味がある。で、此処でも単に<間違えない→上手だ>というよりは<技法の意味をよく理解している→熟練している>という言い方、かと思う。 *「なりにけりな」は敬語遣いが無い。いくら主語が「宮」ではなく「御琴の音」だとしても、聞での会話でなければ他の女房たちへの手前にも「なり(たまひし、たてまつりたまひし)にけりな」とか言いそうだ。それに、「うるさし」もくだけた言い方に聞こえる。

と聞こえたまへば(と起きてから殿が申しなさると)、

「初めつ方、あなたにてほの聞きしは(初めの頃に遠くで少し聞いた時は)、いかにぞや*ありしを(どうなることかと思いましたが)、いとこよなくなりけり(とても素晴らしく良くなりました)。*いかでかは(尤も)、かく*異事なく教へきこえたまはむには(あなたがこうして掛かり切りでご教授なさっているのですから)」 *「ありしを」「なりにけり」と敬語遣いが無い。また、「いかにぞや」もぞんざいな物言いに聞こえる。下品とまでは言わないが、内親王への敬意は感じられない。聞の会話にしても、私のような下世話な読者に近過ぎる気がして、妙に落ち着かない。殿と上にとっては姫宮は子供のようなものであり、その認識を共有している、つもりでいる関係だった、ということだろうか。因みに、殿は47歳、上は37歳、宮は21歳で結婚して六年目。 *「いかでかは」は反語表現、と注にある。下に「さもありなん」くらいが省かれた言い方で<何でそうならない訳がありましよう＝そうなって当然だ>という意味なのだろう。だとしたら、現代語ではむしろ、補うべきは「しかし」などの接続詞で構文を整えるほうが分かり易い。で、「しかしそれも当然で」は会話では<尤も>という言う方をする。 *「ことごとなし」は「異事無し」で<他の事が無い→その事だけに掛かり切り>という言い方らしい。「こと」は多義語で分かり難いが、下の殿の返事が「さかし。手を取る取る」と掛かり切りで教授した事を認めるかの言い方なので、そういう会話なのだろう。

といらへきこえたまふ(と上はお応え申しなさいます)。

「*さかし(確かにその通りだ)。手を取る取る(一つ一つ手を取って教えるのだから)、*おぼつかなからぬ物の師なりかし(分からない所の無い懇切丁寧な先生なわけだな)。 *「さかし」および「なりかし」の「かし」は念押し終助詞と古語辞典に説明されている。一般に、「か」は疑問ないし反語を示す係助詞とされるし、そのように感じるが、少し理屈を捏ねれば、「か」は対象体を改めて客観視する語、かと思う。なので、「さか」は<そうだろうか>と考え直すのであり、「し」は例えば過去の助動詞「き」の連体形と見做せるように、事物を一定の概念に納めて認識していることを示す語だから、改めて<うむ、確かにそうだ>と納得した言い方になる、かと思う。で、「さかし」は使う場面によって「さ」や「か」や「し」に重心が変わって、語意が<そうだな>だったり<

そうぞ>だったり<そうかも知れない>だったり<確かにそうだ>だったりする、のだろう。 *「おぼつかなからぬ」は「おぼつかなくあらず(不確かな所が無い)」の連体形。

*これかれにも(あなたや姫君にも)、*うるさくわづらはしくて(七弦琴の奏法は作法にやかましく押し付けがましくて)、暇いるわざなれば(練習に時間も掛かることなので)、教へたてまつらぬを(お教え申して来ませんでした)、院にも内裏にも(朱雀院に於かれても帝に於かせられても)、琴は(きんは、七弦琴だけは)さりとも(私の宮へのお持て成しに他に行き届かないことがあったとしても、宮は素養がお有りなのだから)習はしきこゆらむ(私が良く習わせ申すだろう)とのたまふと聞くがいとほしく(と仰せになると聞くのが、疑念を持たれているようで心外で)、さりとも(そうは言っても)、さばかりのことをだに(宮がそれなりの演奏すらをお聞かせ申しなされないと)、かく取り分きて御後見にと預けたまへるしるしにはと(このように特に私を宮の御世話役にお預け下された院方の御期待に応えたことにならないと)、思ひ起こしてなむ(思い立ってした事なのです) *「これかれ」に対しては「たてまつらぬ」と敬語遣いなので、「これ」は<あなた>であり<紫の上>に違いないが、「かれ」は桐壺妃なのか大将なのか他の人びとなのかと少し迷った。が、やはり姫君だろう。紫の上に話しているのだから、他の上の管轄外の人を事を持ち出す意味がない。 *「うるさし」と「わづらはし」を事物の性質と評価を説明しているものとすれば<煩雑で面倒だ>という言い方になりそうだが、それが聞き手にとって説得力が有るのかどうかは疑問で、また是が事物の客観的認識ではなく殿の事情だけを言っているのなら、少なからず聞き手に対して無礼というか無神経というか、聞き苦しい印象を受ける。まあ殿が上に何を言おうと勝手なのだろうが、せめて<七弦琴の奏法は>くらいの客観性は補語したいし、「うるさくわづらはし」も<決まりごとが多くて進んでるので無ければ負担が多い>と冗長気味だが幾らかは説得力がありそうに考えてみた。

など聞こえたまふついでにも(などと殿は申しなさる続きに)、

「昔、世づかぬほどを(昔まだ幼かったあなたを)、扱ひ思ひしさま(育てようと思っていた時に)、その世には暇もありがたくて(その頃は忙しくて)、心のどかに取りわき教へきこゆることなどもなく(落ち着いて特に楽器を教え申したことなども無く)、近き世にも、何となく次々、紛れつつ過ぐして(最近も何となく次々と取り留めも無く日を送って)、聞き扱はぬ御琴の音の(聞くこともして来なかったあなたの御琴の音が)、出で栄えしたりしも(素晴らしい出来栄えだったのも)、面目ありて(夫として誇らしくて)、大将の、いたくかたぶきおどろきたりしけしきも(大将がとても興味深そうに感心して聞いていた様子も)、思ふやうにうれしくこそありしか(親の面目を保ったようで嬉しく思いました)」

など聞こえたまふ(などと申しなさいます)。

[第二段 紫の上、三十七歳の厄年]

かやうの筋も(こうした芸事についても)、今はまたおとなおとなしく(このところまた一段と熟練して)、*宮たちの御扱ひなど(女御腹の孫宮たちのお世話などを)、*取りもちてしたまふさまも(管理なさる点に於いても)、いたらぬことなく(周到で)、すべて何ごとにつけても、もどかしくたどたどしきこと混じらず(すべて何ごとにつけても分からなかったり間誤付くことが無く)、ありがたき人の御ありさまなれば(得難い紫の上の御伴侶ぶりなので)、いとかく具しぬる

人は(これほどまでにすべてを備えた人は)、世に久しからぬ例もあなるをと(長生きしない例もあるようだ)、ゆゆしきまで思ひきこえたまふ(殿は不吉にさえ思い申しなさいます)。 *「宮たちの御扱ひ」は<明石女御腹の御子の世話。>と注にある。 *「とりもつ」は「取り持つ(引き受ける、買って出る)」と「執り持つ(取り仕切る、管理する)」があるようだが、この時代の親王・内親王は母方の実家で育てたらしいので、六条院の家政長たる紫の上が「とりもつ」のは<管理監督>だ。

さまざまなる人のありさまを見集めたまふままに(さまざまな女の生き方を見集め為さるにつけても)、取り集め足らひたることは(これほどに多くの美点を取り集め揃えていることは)、まことにたぐひあらじとのみ思ひきこえたまへり(本当に他に例を見ないことだというように殿は上を思い申しなさいました)。

*今年は三十七にぞなりたまふ(上は今年三十七歳に成りなさいます)。 *注に<女の重厄の年。藤壺も三十七で崩御。『集成』は「源氏十八歳の若紫の巻で、紫の上は「十ばかりにやあらむと見えて」とあった。源氏は今四十七歳。多少の齟齬があると見るよりも大体符合するとすべきであろう。厄年にしたのは作者の意図である。『完訳』は「源氏との年齢差を八歳と見るかぎり、紫の上の年齢は三十九歳のはず。作者の意識的過誤か」と注す。>とある。何とも不都合な事態だが、もともと原作本が無くて、幾つかの写本を突き合わせて最大限に確からしい「源氏物語」なるものを想定している、というのが現状で、そういうものとしても相当に長い年月に渡って認められて来ているものなのだから、専門の研究者に「大体符合するとすべき」と言われれば、そうかも知れないと思う他はない。それに、もともとは長編の意図は無く、連載を続ける内に話が込み入ってしまった、という事情も尤もらしい気がする。また、脱稿や改ざん作為も多々ありそうな気もする。ただ、この作者の内の何人かは、と言うのは少なくとも作者は単一人物ではなく、合作か工房製か継ぎ接ぎかは別として、複数であるらしいとは私のような通りすがりの読者には、それぞれの具体箇所の違いを挙げて検証指摘する熱心な研究心は無いが、ほぼ確信するほどに感じるからだが、相当に理屈っぽいので、単純に間違えた、ということはなさそうだ。

見たてまつりたまひし年月のことなども(殿は上を御世話申し上げてきた年月の出来事なども)、あはれに思し出でたるついでに(しみじみと思い出されなさるつれづれに)、

「さるべき御祈りなど(あなたの厄除け祈願は)、常よりも取り分きて(例年よりは念入りに)、今年はつつしみたまへ(今年に畏まってお挙げなさい)。*もの騒がしくのみありて(私は気が逸るばかりで)、思ひいたらぬこともあらむを(その方面の人脈に思い至らぬこともあるだろうから)、なほ(よくよく)、思しめぐらして(あなた御自身の頼れる僧をお考えになって)、*大きなことどももしたまはば(決まれば本式の法事をお挙げになる時には)、おのづからせさせてむ(私が用意させてもらいます)。故僧都のものしたまはずなりにたるこそ(北山の故僧都がお亡くなりになったのは)、いと口惜しけれ(本当に残念なことでした)。おほかたにてうち頼まむにも(縁戚ということではなしに、法事を依頼する本来の主旨からしても)、いとかしこかりし人を(とても立派だった人なのに)」 *「ものさわがし」は<何かと忙しい>ではなく<落ち着かない、気が急ぐ、気が逸る>と古語辞典にある。 *「おほきなることども」は注に<大がかりな仏事。厄除けの祈祷。>とある。「おほし」は<大きい、偉大だ>ではあるだろうが、此处では<正式、本式>と読んでみたい。というのも、此处の文意を<あなたの厄年は気になるが、私には心当たりの寺が無いので、あなたは自分で自分の厄除け祈祷先を考えなさい。もし、大がかりな仏事を挙げるなら、私がさせてもらう。>と読んだのでは、あまりに殿の思い遣りがなく、上が寂し過ぎて見えるからだ。いや、厄年を自分で気を付けて、自分なりにお参りをする、ということは一つの責任感に見え

なくもないし、そういう考えを持っていて当然だという言い方自体は酷とまでは思えない。だから、上自身がそれを自覚して、自分でお参りすることは別に惨めなことではなく、と言って特に立派だとも思わないが、一つの生活信条の表れとは理解できる。が、殿が上の厄年を気にして案じたのなら、祈祷は本人が考えろ、では冷た過ぎるし、そういう言い方をする神経は奇怪しい。というか、殿は広い知見を持っているのだから、心配したなら最良と思える祈祷を上のを考えて用意してくれてこそ思い遣りがある、というものだし、わざわざ言葉を掛けるのなら、そういう言い方をするのが普通だ。が、しかし確かに、此处ではそういう普通の言い方には成っていない。では、此处の殿の発言主旨は如何ということなのか。それは下の文に補説されている。「故僧都」は<北山の僧都。紫の上の祖母の兄。>と注にある。若紫は北山の寺育ちだったので、祖母兄の僧都は亡くなったが、他の僧侶にもそれなりの知己があるわけだ。殿はその人脈に敬意を表した、のだろう。即ち、此处の発言の前提には、殿も多くの僧侶を知ってはいるが、上にもそれなりに付き合いのある僧侶がいる、ということ相互に承知している、という共通認識がある、ということだ。つまり、「なほ思しめぐらして」は「いとかしこかりし人を」の複意語用との倒置関係にあるのであり、殿は上に、何も祈祷自体を<自分自身でお考えなさい>と言ったのではなく、僧の人選を<良く考えてお決めなさい>と言ったのだ。などと、是と言って楽しくもないノートを長々と記さねばならないほどに、何と分かり難く紛らわしい言い回しの文章か。

などのたまひ出づ(などと仰っていました)。

[第三段 源氏、半生を語る]

「みづからは、幼くより(私自身は幼い時から)、*人に異なるさまにて(他人とは違った形で)、ことごとしく生ひ出でて(御所の大変な格式で育ち上がり)、今の世のおぼえありさま(また今の世に認められた地位も)、来し方にたぐひ少なくなむありける(過去に例を見ないほど恵まれたものだ)。*「ひとにことなるさま」は天皇の御子として生まれたということでもあるのだろうが、だとしても御所内で育ち暮らすというのは有り得ないほどの異例なことだったのだろう。親王や内親王は基本的に母方の実家で養われたものらしく、一般に皇太子に指名されなければ御所暮らしは出来なかったようだ。というのに源氏殿は、母君が早世して、かつ実家が貧しく、かつ帝の寵愛が深かった為に、帝が御所に引き取って女房たちに育てさせた、という雲上の花園育ちだ。しかし源氏殿が成人したら、帝もさすがに子供扱いして御所に住ませることは出来ない。しかも、光君には有力な保護者が居ない身なので、帝は彼を親王としては最下位の無品とせざるを得ず、収入がないのに格式張らなければならないその惨めな身分を案じて、桐壺帝は光君を臣籍降下して王家身分から外した。にも関わらず父帝は光君を、時の第二勢力の左大臣家に婿入りさせて実入りを確保し、かつ後宮の桐壺淑景舎は相変わらず光君の私室として使用許可していたという大甘ぶりだ。その甘やかしがこの物語の大きな下地になっていて、光君の藤壺宮との姦淫も朱雀帝妃の寝取りもその遠因が桐壺帝が桐壺更衣に個人的にメロメロだったことに拠る、かのように語られて来ているが、また形としてはその通りの実相もあったのかもしれないが、この平安中期の時の王家の事情として、荘園勢力を束ねる藤原氏の実力は認める他はないものの、犯され続ける旧勢力の苦悩をも自らが背負うべき伝統と意識しなければ、その存在意義を失うという屈折した精神構造に、有能な人ほど囚われ易かった、とは言えそうで、その打開策として桐壺帝は王家の伝統を知る自由人を設定した、ように作者が構想したようにも見える。

されど、また、*世にすぐれて悲しきめを見る方も、人にはまさりけりかし(しかしまた同時に世の中でも特に悲しい目を見ることでも他人より多かっただろう)。*「世にすぐれて悲しきめ」について、源氏殿がそういう被害意識みたいなものを持っているらしいことは既に何度か語られているし、此处でも以

下に雑感が記されるようなので、記事に沿って見直せば此処までのあらすじも整理できそうだ。が、自分は恵まれても居たが、同時に不幸な目にも遭って来た、という殿の主張が多く読者の共感を得そうな印象は無い。どのくらいの思いで言っているのかは分からないが、是が殿の本心からの認識なら、少なくとも私には、今のところ相当に抵抗感のある言い方だ。殿は確かに幼くして実母に死に別れて、母の実感を知らない、という事情ではあるようだが、それ自体が稀有な話でもないし、地位の高い女は社交に生きることが使命なので、子育ては乳母に任されるが多かった筈で、死に別れていなくても必ずしも母と密着して育ったものでもないだろう。それに、実母だから慈しみ深いとも限らない。贅沢に育てられて、それでも自分の生立ちを殊更に不幸だと思うのは、境遇の絶対的な不利条件とは言えず、考え方の問題だ。その他の困難も、夕顔の突然死は意外だったとしても、実際には惟光などの側近が尽力して事を納め、貴重な経験になったのだし、後のゴタゴタにしても基本的に自分が能動的に関わったことの結果であり、いろいろ在った分だけ、言ってみれば、こういう物語になるほど面白おかしく生きてきた、ようにさえ見える。

*まづは(その不幸の第一に)、思ふ人にさまざま後れ(私は思いのある人にさまざまと先立たれて)、残りとまれる***齢の末にも(生き永らえたこの晩年にも)、飽かず悲しと思ふこと多く(相も変わらず心落ち着かず)、あぢきなくさるまじきことにつけても(しかし本意ならず出家が出来ないことが)、あやしくもの思はしく(ただならず気懸かりで)、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば(不安が募る状態で暮らしてきた所為で)、それに代へてや(その代わりということだろうか)、思ひしほどよりは(思っていたよりは)、今までもながらふるならむとなむ(早死にせず今まで長生きできたものと)、思ひ知らるる(思い知られます)。** *「まづは思ふ人にさまざま後れ」については、注に「源氏は三歳の時には母桐壺更衣に、六歳の時には祖母に、二十三歳で父桐壺院に先立たれた。」とある。それに、二十五年前の源氏殿 22 歳の秋には、葵上が 26 歳で亡くなっている。また、今から十八年前の殿 29 歳の秋に六条御息所が 36 歳で亡くなったが、紫上は殿と御息所の仲も当然に承知していた。さらに、十五年前の殿 32 歳の三月に藤壺中宮が 37 歳で亡くなったが、その年の冬に殿は上に、中宮は理想的な人で上はその姪なので面影がある、という言い方で、中宮への恋慕をそれとなく仄めかした場面が朝顔巻三章三段にあった。そして夕顔についても、突然死自体はもう三十年前の殿 17 歳の八月で夕顔も 19 歳の早世だったが、十二年前の殿 35 歳の秋に 21 歳の撫子を落成直後の六条院に引き取る際に、どこまで打ち明けたかは定かでは無いが、撫子が母と死別した事情を説明する為にか、玉鬘巻四章五段で殿は上に夕顔との関係を話している。まあ、「思ふ人にさまざま」とあるから、私も此処で殿が死別した女たちを挙げてはみたのだが、殿は上にあくまでも「さまざま」と言ったのであり、誰かとの死別を特に悲しく考えての昔話ではなく、この殿の発言の主旨はどうやら、決して自分は恵まれていただけではなく、辛い目にも多々遭って来た、という憐憫売りの同情買いにこそありそうで、それというものも此処の発言全体の主旨である上を宥める為の地ならし、という意図を持った話の仕方のようだ。 *「よはひのすゑ」は「晩年」であり、即ち「現状」だ。で、それが「飽かず悲しと思ふこと多く」とあることについて、注には「『集成』は「具体的には明らかではないが、次の言葉から、藤壺や六条の御息所など、悔恨にみちた青春時代を回想しての感慨と思われる」。『完訳』は「現実世界への不満。その具体内容が次の「あぢきなく一」に語られるが、冷泉帝の皇統の断絶した無念さもひびいていよう」と注す。」とある。が、これは正に「具体的には明らかではない」ことこそが文意なのだろう。無常の世にあって「晩年に心残りや不安なことが多い」というのは、既にこの物語で何度も述べられている「出家願望」を示す言い方だ。自分に繋がる後世に災いが無いように、せめて晩年は静かに念仏修行して善行を積んで安心したい、という考え方があったようだ。だから、「あぢきなくさるまじきこと」は「不本意にも姫宮のお世話を引き受けたために出家できなくなったこと」であり、いよいよ以てこの殿の発言が、上に対して、宮との結婚の言い訳であり、深い理解と寛大な対応を願っての取り繕いであることがはっきりする。こ

の時点で殿が上に自分の不遇を言い出すことに、私は少なからず違和感を感じたが、作者は読者にわざと違和感を感じさせる書き方をしていたわけだ。古文の当時の現代語文の今更ながらの難解さだ。

君の御身には(あなたの御立場にとっては)、かの一節の別れより(あの一時の不遇時代の別離の他には)、あなたこなた(その前にも後にも)、もの思ひとて(心配事があったにしても)、心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ(立ち行かなく成る程のことは無かったと思います)。

后といひ(皇后と言えども)、ましてそれより次々は(ましてそれ以下の人々は言うまでも無く)、やむごとなき人といへど(この上ない高貴な身分の人であっても)、皆かならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり(宮仕えする人は皆がその社交生活で他人との張り合いに、必ず心穏やかならぬ悩みを持つものです)。

高き交じらひにつけても心乱れ(実家から手厚い援助を受けての御所暮らしでも気苦労があつて)、人に争ふ思ひの絶えぬも、やすげなきを(他人と張り合う競争心に駆られて心が休まらないものを)、親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし(親の家さながらに此処に住まっていらっしゃるようなあなたの暮らしほど心安らかなものはありません)。そのかた(この点を)、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや(あなたは他人より恵まれた運勢とお分かりでしょうか)。

思ひの外に(思いの外のこととして)、この宮のかく渡りものしたまへるこそは(朱雀院の宮姫がこのように興入れなされたことについては)、なま苦しかるべけれど(なにぶん差し障りはあるだろうが)、それにつけては(その見合わせとして)、いとど加ふる心ざしのほどを(いっそう増した私の愛情を)、御みづからの上なれば(あなたは御自身のことなので)、思し知らずやあらむ(お気付きでないかもしれませんが)。ものの心も深く知りたまふめれば(しかし、あなたは本当の事が分かる人でしょうから)、さりともとなむ思ふ(それでも分かって頂けるとも思います)」

と聞こえたまへば(と殿が申しなさると)、

「のたまふやうに(仰るように)、ものはかなき身には(頼り無いこの身には)、過ぎにたる*よそのおぼえはあらめど(十分に恵まれた立場と傍目には見えるでしょうが)、心に*堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや(張り合いのない虚しさばかりが自分では感じられるので)、*さはみづからの祈りなりける(その出家は私の方の願いなのです)」 *「よそのおぼえ」は殿が言った「御みづからの上」に対して、その殿の「心ざしのほど」が上には<届いていない>と間接的に訴えて、逆にそんなことも分からないのか、と切り返したような皮肉というか痛烈な批判というか諦めというか、絶望感みたいなものを示しているように見える。 *「堪ふ(たふ)」は<我慢する、辛抱する>または<保持する、維持する>の他に<価値がある、値する>の意味がある、と大辞泉にある。「心に堪ふ」は<我慢できる>ではなく<思う価値がある→張り合いがある>という意味だろう。「もの嘆かしさ」は<空しさ、虚しさ>。「うち添ふ」は<内心で募る→自分にはますますそう思えて来る>。「や」は上文を理由に挙げて下文に結論する係り結びの語法で、「なりける」と連体形で結ぶ。 *「さは」の「さ」は、殿が先に「あぢきなくさるまじきこと」と話題にした<出家>のことだろう。

とて、残り多げなるけはひ(と言って多くを語らない上の様子は)、*恥づかしげなり(控え目なのです)。 *「恥づかしげ」は分かり難い。上が殿に今更<恥づかしそう>にすることなどなれりそうもない。また、

この聞で、傍目に気が引けるほど<立派な態度>を取る意味も無い。で、この「恥づかしげ」の語意よりも、上が此処で見せそうな態度の方を考えてみる。と、上は姫宮が来て以来、ずっと出家を本気で考えている、との記事があった。そして最近、宮は今上帝の妹宮として格が上がり、殿もいよいよ宮を大事にせざるを得なくなってきた、上が名実ともに正妻の地位を追われるのが時間の問題に成って来た。もう、そういう趨勢は隠しようも無い。上は惨めな身を曝す前に出家したいと、以前に増して思っているが、殿は許さない。で、上は殿に何度も出家を願う上げるのもくどいかと「さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず」(三章一段)と遠慮している。だから、此処でも上は<控え目に>出家を願う出た、と読んで置く。

「まめやかには(本当の所)、いと行く先少なき心地するを(もう先が長くない気分です)、今年もかく知らず顔にて過ごすは(今年もこのように平気そうな顔で過ごすのは)、いとうしろめたくこそ(とても不安なのです)。さきざきも聞こゆること(以前にも申し上げたことですので)、いかで御許しあらば(どうかお許し下さいますよう)」

と聞こえたまふ(と申し上げなさいませう)。

「それは*しも(それは決して)、あるまじきことになむ(あつてはならないことだ)。 *「しも」は、「あらず」や「ならず」などと否定語で結ばれば<必ずしも~ではない>という未決の言い方であり、「あらむ」や「なむある(あり)」などと肯定語で結ばれば<必ず~でなければならぬ>という既決強調の言い方となる、とのように古語辞典の説明を理解する。此処では「なむ(ある)」と肯定文なので既決強調だが、形容語が「あるまじき」という否定形なので、対象語に対しては<必ず~でなければならぬ>は<決して~あつてはならない>という言い方になる、のだろう。ということは語感として分かるが、此処の語用が特に肯定文型での典型に思えるので、少し語の構成を考えてみる。先ず「し」については、一般に強調の副助詞と分類されているようだが、語認識の過程としては、過去の助動詞「き」の連体形語用から<そう成っているもの→規定>という概念認識が広まった、と私は推理する。次に「も」だが、これは文中での条件設定を示す係助詞のようで、否定構文では「し」で規定された対象体についての一定の既定認識が一面では<あつたとしても>と、より広い視点での再考察を促す語用となり、肯定構文では一定の既定認識が他面に<あることから>と、限定した対象体の同一状態を改めて再確認する念押し強調の語用となるようで、いずれにしても「も」は複数視点の設定を示している。

さて(そのようにあなたが)、かけ離れたまひなむ世に残りては(別離なされた後の世俗に取り残されたのでは)、何のかひかあらむ(私に何の生きる意味がありません)。ただかく何となくで過ぐる年月なれど(ただこのように特に如何ということも無く過ごす年月でも)、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ(毎日あなたと親しく会える嬉しさこそが)、ますことなくおぼゆれ(この上無いものと思えるのです)。なほ思ふさま異なる心のほどを見果てたまへ(もっと私があなたを思う気持ちが特別なものだという事を見極めて下さい)」

とのみ聞こえたまふを(という制止ばかりを殿が申しなさるのを)、例のことと*心やましくて(上はいつもと同じことの繰り返しと遣り切れない思いで)、涙ぐみたまへるけしきを(涙ぐみなさる姿を)、いとあはれと見たてまつりたまひて(殿は何ともいじらしく御覧になって)、よろづに聞こえ紛らはしたまふ(何かと紛らすように宥め申しなさいませう)。 *「心やまし」は<物足りなく思う。不満だ。>と古語辞典にある。ただ、此処では<遣る瀬無い、悲しい>という語感に思う。

[第四段 源氏、関わった女方を語る]

「多くはあらねど(数は多くないが)、人のありさまの(女の生き方の)、とりどりに口惜しくはあらぬを見知りゆくままに(それぞれに身分の高い人を見て来たところ)、まことの心ばせおいらかに落ちぬたるこそ(心底の気立てが大らかに落ち着いているというのは)、いと難きわざなりけれとなむ(なかなか得難いものなのだ)、思ひ果てにたる(思い至っています)。

*大将の母君を、*幼かりしほどに見そめて(大将の母君を十二歳の元服と同時に初めて通い先の妻として)、やむごとなく*え避らぬ筋には思ひしを(尊い方であり、とても別れられない縁談とは思いましたが)、常に仲よからず(ずっと仲が良くな)、隔てある心地して止みにしこそ(打ち解けぬ気持のまま終わってしまったことが)、今思へば、いとほしく悔しくもあれ(今思えば心残りです)。 *「だいしゃうのははぎみ」は注に<葵の上をさす。源氏の詞中での呼称。以下、葵の上評。>とある。殿が一般的に葵の上をこう呼んだ、というわけでもないのだろう。それでもこの物語中で、この人が話題になること自体が、その重要な役割の割には少なく、この時点で、紫の上に対して、殿が故人である最初の正妻をこう示した、ということ自体が、やはり注目される。そしてまた、読者にとっても、今現在では、是が最も分かり易いこの人の呼称に思える。 *「幼かりしほどに見そめて」については、注に<源氏は十二歳で元服、その日の夜に葵の上と結婚。>とある。が、葵の上を二条院に迎えることはしなかった。源氏殿が左大臣家に婿入りしたのだ。だから普通なら、殿は藤原左家の傘下に組み込まれて、その援助を受けて、同時に左家の為に尽力する、という人生に落ち着きそうなものだ。桐壺帝も光君を無品親王に繋ぎ置くに忍びなく臣籍降下させて、藤原左家に婿入りさせた、はずだ。が、何と桐壺帝は桐壺更衣への思いがいつまでも強く残ったのだろうか、光君の為に更衣の実家跡地に立派な二条院を公費で造営させた、と桐壺卷三章八段に簡素ながら鮮烈に記されていた。光君もその帝の依怙最上甘え、左大臣もその特別待遇にある光君の養父たる地位を利用して自勢力の拡大を図った、という事かと思う。この政略性が葵の上を素直な可愛い女にさせなかった。いや、政略自体は身分社会に於いて、貴族が秩序と勢力の維持のために当然に計算しなければならぬ責務だ。が、当政略にあつては男が責任を果たさないので、女だけに緊張を強い過ぎた。葵の上は三条邸に居る限りは大藤原の女を体現しなければ成らない。尊大に構えていなければ家が持たない。だというのに、岳父の左大臣は光君に大甘だった。光君も三条邸では遠慮すべきだった。威張りたければ、葵の上を二条院に迎えて其処で威張れば良い。のに、光君は二条院を寛ぎの世界にしたくて、其処では藤壺の夢を見るばかりだ。それでも、葵の上が鈍感で、そういう複雑な事情に関せず大らかでいたなら、確かに事態は違ったかも知れない。が、不幸にも、葵の上は、その複雑な事情をそのまま体現したような高飛車な女だった、みたいな風に、特に殿の口からは語られていた。しかし、大藤原の姫君が、それなりの才色兼備で、それなりに期待されて手厚く育てられれば、特に長女は弘徽殿大后もそうだったが、角々しいのが普通だろう。まして葵の上は大宮の実娘であり、その王家血筋の濃さは、外形上の正統性はともかく、血縁自体では光君以上とさえ言えるほどで、源氏の優美さなど底が知れており、むしろ晴舞台たる朱雀春宮への入内を、この父大臣の政略で逸したのであり、その被害者意識も必ずや幾分は在った筈だ。 *「え避らぬ筋」は<逃れられない間柄=別れられない婚姻>くらいか。

また(しかしまた)、わが過ちにのみもあらざりけりなど(それは私だけの所為ではなかったのだろうと)、心ひとつになむ思ひ出づる(自分なりに思い出されるには)、うるはしく重りかにて(かの君は麗々しく尊大で)、そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき(何処と言って至らないと思われる点も無かったが)ただ、いとあまり乱れたところなく(ただあまりにも整然としていて)、すくすくしく(格式張って)、すこしさかすとやいふべかりけむと(少し気が強いかと

言うべきだろうと)、思ふには頼もしく(考える分には頼もしく)、見るにはわづらはしかりし人さまになむ(実際に会う分には気難しい人柄でした)。

*中宮の御母御息所なむ(中宮の御母御息所という人は)、さま異に心深くなまめかしき例には(別格の真髓に深く通じた王朝美の手本としては)、まづ思ひ出でらるれど(第一に思い出される人だが)、*人見えにくく(私たちの仲には、他人には分かり難く)、*苦しかりしさまになむありし(苦しかった事情があったのです)。*「中宮の御母御息所」は注に<六条御息所。源氏の詞中での呼称。以下、六条御息所評。>とある。これも、この時点で殿が上に対して六条御息所を示した呼び方、ということだろうが、読者にも分かり易い呼称だ。*「人見えにくし」は<人となり分かり難い>という言い方にも見えるが、「見え難し」はク活用形容詞で<見られることがいやだ。会うのが気詰まりだ。>と古語辞典にあるので、「人見えにくし」は<人嫌いだ>ということかも知れない。また、一般論調に於ける「人懐こい(親しみ易い)」の反対語と見れば、立場や秩序にこだわって<親しみ難い>くらいの語感がある。しかし、話中の所為か敬語遣いが無いので、是を俄かには御息所の説明とは取り難く、殿と御息所の関係性の事情説明と考えて、さらに「苦しかりし」を補説する連用形の「く」の意を汲めば<気楽には会えずに>という言い方くらい、かとも思うが、何処か先入観に捉われているようで何か釈然としない。どうも、是は「苦しかりしさま」を一緒に考えた方が良さそうだ。*「苦しかりしさま」の「さま」は「御」が無いので、御息所の<姿>ではないのだろう。前項でも見たが、「人見えにくし」も結局はこの「さま」を説明している。つまり、この「さま」は<殿と御息所の関係性の事情>を言っているのだろう。では、「人見えにくく苦しかりし」は如何いう内容の事柄を言っているのだろうか。いや、まだ内容は何も言っていないのだ。この文は、「人見えにくく」が<他人には分かり難くて>、「苦しかりし」が<苦しかった>という、そのままの言い方で「さまになむありし(事情があったのです)」と結ぶ、以下に詳細を述べる前置き口上なのだ。

*怨むべきふしぞ(御息所ほどの方を正式な妻には迎え申し上げずにいたので、恨むことになる理由は)、げにことわりとおぼゆるふしを(確かに分かると思えるものだが)、やがて長く*思ひつめて(正にずっとその思いが積み重なって)、深く*怨ぜられしこそ(私が深く恨まれたのは)、いと苦しかりしか(どんなに苦しかったことか)。*「怨むべきふし」とは殿が御息所に熱心に通わなかったことなどで結果として軽んじた、という経緯なのかもしれないが、具体的には葵巻一章一段で光君が桐壺院から直接たしなめられたように、式を挙げて正式に妻を迎えることをしなかった、という形式上の儀礼の方が御息所にとっては重要だったようだ。で、それが重荷になって、また藤壺宮との不義露見への恐怖もあって、葵上の早世を御息所の呪いと考えたか、または生き霊を見た事から車争いで屈辱に対する御息所の自尊心の高さを畏れたのか、それらの全てだったか、何れにせよ葵上の死去後にますます光君は御息所と疎遠になった、と賢木巻一章一段に語られていた。そういう経緯からしても、此処の文全体の意味からすれば、この「怨むべき」の主語は御息所と思われるが、「怨みたまふべき」みたいな敬語遣いが無い。是は御息所が故人だからなのではなく、一般概念としての物言いの体裁を取って理詰めを試みる言い方だから、なのだろう。であれば、「怨むべきふしぞげにことわりとおぼゆるふしを」は本来は<怨むべきふし、のあるは、げにことわりとおぼゆるを>で完結すべき文なのだ。が、それを「ふしを」という「を」の変則語用で下文に続けて、全体がクセのある、という分かり難い文に成っている。せめて好意的に解せば、「怨み」という忌み詞を御息所の能動的な言動の印象から故意に遠ざけて、あくまでも是は殿の「心ひとつになむ」見方に過ぎない、という庇い方をした言い回しなのかも知れない。*「思ひつむ」は「思ひ積む」で<思いが重なる>という自動詞。御息所が<思いを重ねる>という言い方ではない。で、「ふしを」の「を」は、「ふし」を対象体と指し示す格助詞ではなく、「ふしぞ」の「ぞ」という係助詞で対象強調された「ふし」の補説句を結ぶ説明の終助詞という構文であり、「思ひ積む」の主語は「怨むべきふし」だ。*「怨ぜられし」は注に<「られ」受身の助動詞。源氏が御息所から怨まれたのはつらいことであった、の意。>とある。

*心ゆるびなく恥づかしくて(気を抜くことなく緊張していたものですから)、我も人もうちたゆみ(私も御息所も寛いで)、朝夕の睦びを交はさむには(普段から親しく語り合うには)、いとつつましきところのありしかば(とても遠慮がちになるところがあったので)、うちとけては見落とさるることやなど(馴れ馴れしい態度は品位を損なうのではないかと)、あまりつくろひしほどに(あまりに体面を繕っているうちに)、やがて隔たりし仲ぞかし(次第に疎遠になってしまった仲というところでした)。 *この文は理詰めではなく、結局は気持のすれ違いがどうにもならなかった、という事情をその実感として説明する言い回しだ。で、似通った語の微妙な違いに説得力を持たせようとしているようで、まどろっこしいようにも見えるが、むしろ各語の語用を見比べる好例と見て、其処を理詰めで考えて見たい。軟派A類は、こころゆるぶ(心弛ぶ)―気を緩める(気を抜く)。うちたゆむ(打ち弛む)―内輪で寛ぐ。うちとく(打ち解く)―身内同士として公的な礼儀を外す(馴れ馴れしくする)。硬派B類は、はづかし―(他者の目を気にして)緊張する。つつまし―(慎んで)遠慮がちにする。つくろふ―格式を張り続ける(体裁を施す)。

いとあるまじき名を立ちて(御息所は私との間に、とても不名誉な浮名が立って)、身のあはあはしくなりぬる嘆きを(皇太子の未亡人という立場が軽々しくなってしまった嘆きを)、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく(非常に気にして思い詰めていらっしゃったのがお気の毒で)、げに*人がらを思ひしも(確かにそういう御息所の社会的な身分事情を考えたら)、我罪ある心地して(私に非が有る気がして)止みにし慰めに(結婚まで行かずに終わってしまったお詫びに)、中宮を*かくさるべき御契りとはいひながら(娘御の中宮を、皇太子の実子であれば、このように皇后の地位に就くべき御血筋とは言いながら)、取りたてて(両親亡き後の親代わりを引き受けて取り立てて立後に尽力申し上げ)、世のそしり(弘徽殿女御の藤原勢や麗景殿女御の式部卿宮家からの非難も)、人の恨みをも知らず(朱雀院の恋情も顧みず)、心寄せたてまつるを(御世話申し奉った事を)、かの世ながらも見直されぬらむ(あの世からでもお認め頂けたことだろう)。 *「人がら」が御息所の<性格>だとすれば「御」が付かないのは解せない。で、念の為の本文確認で写本画像サイトを当たると、東京国立博物館の保坂本(65/151)も京都大学本(pp. 114-115)も「いとをしくけに人からを思しも」と書いてあるようで、「御」は無い。となると、「人から」の「人」が御息所で「から」が御息所の属性を示しているとは考えにくく、「人から」という語で<ある人の社会的な事情=身分上の立場>を意味するのではないかと考えてみた。つまり、この「人から」は事態を客観視した論理語用だ。 *「かくさるべき御契りとはいひながら」は注に<后という高い地位になるご宿縁とはいっても。>とある。「さるべき御契り」は<そうなる当然の御因縁>という言い方で、「かく」は実際に中宮に成っているのだから、という意味ではあるのかも知れない。が、「御契り」は<前坊と御息所の情交>を示した言い方と取ってみたい。

今も昔も(今の姫宮を迎え申して混み入った夫婦関係だけでなく、昔の夫婦関係でもこのように)、*なほざりなる心のすさびに(さらなる別の場面に応じた真心のままに)、いとほしく悔しきことも多くなむ(全体では不都合で至らないことも多くなるのです) *「なほざりなる心のすさびに」は、渋谷訳文に「いいかげんな気まぐれから」、与謝野文に「浮ついた心から」、としてある。大体そういうことだろうし、典型的な色男の言い種のように思えるが、それだけに此処はむしろ、「なほ」「さらなる」「心のすさび」「に」という構成の語と見て、その理屈を考えて言い換えて見たい。

と、来し方の人御上、すこしづつのたまひ出でて(と殿は過去の女たちとの御関係を少しづつお話し出さなさって)、

「*内裏の御方の御後見は(女御の君の御世話役である明石御方は)、何ばかりのほどならずと(受領家の娘だったので大した身分の者ではないと)、あなづりそめて(初めは軽く見て)、心やすきものに思ひしを(気楽な相手と思ったが)、なほ心の底見えず(実は教養が高く)、際なく深きところある人になむ(その出身身分とは違って深みのある人なのです)。 *「うちのおんかたのおんうしろみ」は注に<以下「ところこそあれ」まで、源氏の詞。源氏の詞中での明石御方の呼称。以下明石御方評。>とある。これも、この時点で殿が上に対して明石御方を示した呼び方、ということだろうが、是は読者には分かり難い呼称だ。といて、此処の殿の言葉を<明石御方>と簡素に言い換えるのは文意を損なうだろう。で、不自然ながら併記した。

うはべは人になびき(うわべは人に従って)、おいらかに見えながら(おっとりしているように見えながら)、うちとけぬけしき下に籠もりて(打ち解け切らない雰囲気がある内にあって)、そこはかたなく恥づかしきところこそあれ(どこか気が張るところがある人です)」

とのたまへば(と仰ると)、

「*異人は見ねば知らぬを(他の人は会っていないので分かりませんが)、これは(この人は)、まほならねど(几帳越しながら)、おのづからけしき見る折々もあるに(女御の御世話についての打ち合わせもあって、当然に会って意向を話し合う機会が何度かありますが)、いとうちとけにくく(礼儀正しいので、あまり近しく出来ず)、心恥づかしきありさましるきを(頑なな心構えがはっきり分かるので)、いとたとしへなきうらなさを(私のまるで比べものにならない不仕付けな率直さを)、いかに見たまふらむと(あちらがどうお思いになるのかと)、つつましかれど(気が引けますが)、女御は(女御は私の気性をご存知なので)、おのづから思し許すらむとのみ思ひてなむ(そういう関係を自然とご理解頂けるものと思っています)」 *この紫の上の発言は、明石御方に敬意は表しながらも、その守りの堅い姿勢に相当な不満がある事を率直に話している珍しい内容だ。それだけに複雑な表現になっていて、文意に見合う補語の推定は難しいが、上は各語に文字通りではない語感を滲ませた言い回しをしているので、補語しなければ却って文意を損なう、かとも思う。

とのたまふ(と上は仰います)。

さばかりめざましと心置きたまへりし人を(相当な目障りに気に為さっていた人を)、今はかく許して見え交はしなどしたまふも(今はこうして寛大に会って話し合いなどなさるのも)、女御の御ための真心なるあまりぞかしと思すに(女御の御ためならという気配りなればこそと紫の上はお思いなので)、いとありがたければ(殿はとても感謝して)、

「君こそは(あなたは)、さすがに隈なきにはあらぬものから(さすがに無心ではないだろうが)、人により(相手により)、ことに従ひ(事に応じて)、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ(とてもうまく本心と愛想の表情を使い分けていらっしゃる)。さらにここから見れど(他に多くの人を見ても)、御ありさまに似たる人はなかりけり(あなたに比べられる人は居ません)。いとけしきこそものしたまへ(とても稀有でいらっしゃる)」

と、ほほ笑みて聞こえたまふ(と殿は微笑んで申しなさいます)。

「宮に、いとよく弾き取りたまへりしことの喜び聞こえむ(宮にとてもよく七弦琴が御弾きになりなされたことを褒めて差し上げよう)」

とて、夕方渡りたまひぬ(と言って殿は夕方に寝殿にお渡りになりました)。我に心置く人やあらむとも思したらず(宮は自分を目障りに思っている人が居るともお気づきにならず)、いといたく若びて(もうまったく単純に)、ひとへに御琴に心入れておはす(ひたすら御琴を熱心に練習していらっしやいます)。

「今は(昨日の音楽会の後だから今は)、暇許してうち休ませたまへかし(少し間を置いて練習をお休みなされたらどうですか)。物の師は心ゆかせてこそ(先生は勿体をつけてこそ、教えが有難く思えるでしょう)。いと苦しかりつる日ごろのしるしありて(とても苦勞して毎日練習した甲斐があって)、うしろやすくなりたまひにけり(安心して聞けましたよ)」

とて、御琴どもおしやりて、大殿籠もりぬ(と言って殿は御琴類を横へ押し遣ってお寝すみにになりました)。

[第五段 紫の上、発病す]

対には(東の対にあっては)、例のおはしまさぬ夜は(いつものように殿がいらっしやらない夜は)、宵居したまひて(紫の上は遅くまで起きていらして)、人びとに物語など読ませて聞きたまふ(女房たちに物語などを読ませてお聞きになります)。

「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも(このように世情の例として語り集められた昔話の数々にも)、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女(浮気男や多情者などの二心ある人に関わった女という)、かやうなることを言ひ集めたるにも(この私のことに似たような話が多くある中にも)、*つひに寄る方ありてこそあめれ(最後は頼る人が在ることになるようだ)。あやしく(それに比べて私は何と)、*浮きても過ぐしつるありさまかな(不安定な立場で暮らして来たものだ)。*「つひに寄る方ありてこそあめれ」は、いかにも「寄る方あり」が何かの先例を引いた言い方のように見える言い回しだ。で、注にもいくつか指摘があるが、分かり難いので素通りする。「寄る方」は<頼り先>くらいの言い方だろう。*「浮きても過ぐしつる」については、注に<『集成』は「ずっと源氏の正式な北の方としてではなく過してきたこと。それゆえ、今は北の方として女三の宮がいる」と注す。>とある。確かに、殿と紫の上は式部卿宮家を親と立てての正式な婚儀は挙げていない。二人の初夜は、二十五年前の八月に没した葵の上の忌明け直後の十月であり、左大臣家に対して不謹慎に見える世間体の悪さもあつたし、若紫を二条院に引き取っていること自体を実父の式部卿宮(時の兵部卿宮)に隠していたという事情でもあり、何よりも六条御息所を正式に妻に迎えないままに、他の女を妻にすることは桐壺院に申し訳が立ちそうもなかった、のだろう。葵卷三章二段で、殿は惟光に祝い餅を用意させて、二人の婚儀を内祝いで済ませてしまった。しかし、源氏殿が表立って紫の上を妻に迎えたとしても、桐壺院にも左大臣家にも式部卿宮家にも幾らかの不都合はあつたにせよ、決して納得して貰えないという間柄でも事柄でもなかった、ようには見える。すべては藤壺中宮との密通とその不義の子に拘る源氏殿自身の、それも内心での負い目や恐怖が、源氏殿をして左大臣家や式部卿宮家に対して過剰な対抗心を持たせた、かのような文脈で語られてきた。そして、それらの人々との人間関係が、実に今日までその基本的な朝廷組閣に於ける秩序組織構造上の立ち位置に於いて変わらないことによって、殿と上の関係を正式なものに整えられら

ないままに、別の人間関係がその上に構築されてしまって、今更に公認の内縁関係を再確認する以外の現実性の無きに至っている。従って、紫の上は正式な北の方の立場を認められていない。

げに、のたまひつるやうに(確かに殿が仰るように、宮仕え出来たとしても幸せとは限らないし)、人より異なる宿世もありける身ながら(帝妃に養母と敬われて、人と違って恵まれた運勢であるかもしれない私だが)、*人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ(人がどうしても耐え難く諦められないという生き甲斐を失った立場で死んでゆくというのは)、あぢきなくもあるかな(遣り切れないものだ) *「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ」は何を指すのか。紫の上は、自分には「寄る方」が無い、と思っているようで、「浮きても過ぐしつるありさま」を不満に思っているらしい。前項ノートで見たように、紫の上が正式に北の方として処遇されないのは、偏に源氏殿の内心での歪んだ負い目に寄るものなので、紫の上自身としては、王家血筋とは言え妾腹で、母にも祖母にも死に別れた擁護の薄い身の上を、臣籍降下したとは言え評判の高い光源氏に見初められたのは幸運かも知れないが、内縁関係に置かれ続けることを納得すべき理由は無い。それでも以前は、実態として紫の上は正妻の地位に遇されて来たが、姫宮の降嫁以降はさすがに、正妻の地位は内親王たる姫宮に襲われる。いくら殿が、君は心の妻だから、とか言っても、寝殿に住まうのは姫宮だ。上も宮も子を儲けていないから、まだこんなどっちつかずみたいな話になっているが、客観情勢はとっくに白黒がはっきり決まっていて、上が自分の黒星を見苦しく思うのは当然であって、殿の無神経振りが酷いだけだ。上が失うのは、外形では尊厳だろうが、内面では夫に尽くす張り合い、延いては生き甲斐、なのだろう。尤も、物質上の生命体構築はその存在自体がもともと人智を超えているので、その自己増殖という機能設計の設定を各個体が自らの生存目的として受け入れるものとするなら、自己変容の可能性の追求も含めて、物質消費について足るを知り、生産と保全に於いて用意された分の情熱を持って生き甲斐を全うして、もう己の生きる効果が何も他に及ばなくなる物理機能の限界点以上まで生きた、ように見えるのを他の個体が客観的に<大往生>と言う、ような気がしないでもないが。

など思ひ続けて(などと思ひ続けて)、夜更けて大殿籠もりぬる(紫の上は夜深くにお眠りになりましたのですが)、暁方より(その明け方から)、御胸を悩みたまふ(御胸の痛みを訴えなさいました)。人びと見たてまつり扱ひて(女房たちが看病申し上げ案じて)、

「御消息聞こえさせむ(殿にお知らせ申し上げます)」

と聞こゆるを(と申すのを)、

「いと便ないこと(ご心配を掛けるので、それはいけません)」

と制したまひて(と上は制止なさって)、堪へがたきを押さへて明かしたまひつ(苦しいのを我慢して朝を迎えなさいました)。御身もぬるみて(お体に熱があつて)、御心地もいと悪しけれど(ご気分もひどく悪かったが)、院もとみに渡りたまはぬほど(殿が早くにお戻りなさらない内は)、かくなむとも聞こえず(こういう状態だとはお知らせしません)。

[第六段 朱雀院の五十賀、延期される]

女御の御方より御消息あるに(女御のお部屋から対にご機嫌伺いの女房が来たので)、

「かく悩ましくてなむ(このように気分が勝れなくて)」

と聞こえたまへるに(と上がお応え申しなさると)、驚きて(女御は驚いて)、そなたより聞こえたまへるに(殿にお知らせ申しなさると)、胸つぶれて(殿は心配で)、急ぎ渡りたまへるに(急いで対にお戻りなさったが)、いと苦しげにておはず(上はとても苦しそうでいらっしやいます)。

「いかなる御心地ぞ(どんな具合だ)」

とて探りたてまつりたまへば(と殿は布団の中を探って上の体を確かめ申しなさると)、いと熱くおはずれば(とても熱が高くいらして)、昨日聞こえたまひし御つつしみの筋など思し合はせたまひて(昨日お話し申しなさった厄除けのことなどを思い合わせなさって)、いと恐ろしく思さる(とても不吉にお思いになりました)。

御粥などこなたに参らせたれど、御覧じも入れず(殿は朝食などを枕元に用意させなさったが、上は目も呉れなさいません)。日一日添ひおはして、よろづに見たてまつり嘆きたまふ(殿は一日中上に付き添いなさって、いろいろと介抱なさり心配なさいます)。はかなき御くだものをだに(上はちょっとした御くだものでさえ)、いとも憂くしたまひて(全く受け付けなされず)、起き上がりたまふこと絶えて、日ごろ経ぬ(起き上がりなさること無く、寝込んだまま数日が経ちました)。

いかならむと思し騒ぎて(殿は上にもしものことがあってはと胸騒ぎなさって)、御祈りども(いろいろなご祈祷を)、数知らず始めさせたまふ(数知らず始めさせなさいます)。僧召して、御加持などせさせたまふ(僧を六条院に呼んで御印法なども挙げさせなさいます)。

そこところともなく(何処其処と限らず)、いみじく苦しくしたまひて(上は非常に痛がりなさって)、胸は時々おこりつつ患ひたまふさま(咳き込みが時々起こって息苦しく為さる様子は)、堪へがたく苦しげなり(我慢できないほど辛そうです)。

さまさまの御慎しみ限りなけれど(何か神に障ったかと、本復願掛けにさまさまの事物断ちを試しても)、しるしも見えず(効き目がありません)。重しと見れど(重い病気でも)、おのづからおこたるけぢめあらば頼もしきを(自然と回復する兆しがあれば安心だが)、いみじく心細く悲しと見たてまつりたまふに(上の容体が非常に心細く不安に押し申しなされるので)、異事思されねば(他の事を考える余裕が殿には無くいらして)、御賀の響きも静まりぬ(朱雀院の五十賀の準備も中止になりました)。かの院よりも(朱雀院の方からも)、かく患ひたまふよし聞こし召して(上がこのように患いなさった事をお聞きあそばして)、御訪らひいとねむごろに(お見舞いを非常に丁重に)、たびたび聞こえたまふ(たびたび遣わしなさいました)。

[第七段 紫の上、二条院に転地療養]

同じさまにて、二月も過ぎぬ(同じ状態のまま二月も終わりました)。いふ限りなく思し嘆きて(殿は言葉も無く悲しみなさって)、試みに所を変へたまはむとて(試みに療養場所を変えてみようとなさって)、二条の院に渡したてまつり*たまひつ(上を二条院にお移し申し上げることに

なさいました)。*「たまひつ」の「つ」は完了の助動詞だが、古語辞典に<「つ」は多く他動詞につき意思的な完了を表わし、「ぬ」は多く自動詞につき自然的な完了を表わす。>と説明がある。で、ざっと「つ」が意思決定を、「ぬ」が終了状態を示す、と見れば、此処の文は上を二条院に<お移し申し上げた>のではなく<お移し申し上げることにした>と読める。で、そう読めば、続く文はその転居時の様子と読める。

院の内ゆすり満ちて(この上の御転居には六条院中が大騒ぎとなつて)、思ひ嘆く人多かり(悲しむ人が多く居ました)。冷泉院も聞こし召し嘆く(冷泉院も紫の上の転居療養をお聞きあそばして御病状を心配なさいます)。この人亡せたまはば(この人がお亡くなりになったら)、院も、かならず世を背く御本意遂げたまひてむと(源氏大殿も必ず出家なさるに違いないと)、大将の君なども、心を尽くして見たてまつり扱ひたまふ(大将源君もこまごまご転居のお手伝いに奔走なさいます)。

御修法(みしゅほふ、お焚き上げ)などは(などの念仏講は)、おほかたのをばさるものにて(一通りのものは当然の事として)、取り分きて仕うまつらせたまふ(転居に際しては殿は特別に厳しく挙げさせなさいます)。

いささかもの思し分く隙には(上は幾らか意識がはっきり為さっている時には)、

「聞こゆることを(以前から申し上げている出家を、お許し頂けないのが)、さも心憂く(ほんとうに重荷なのです)」

とのみ恨みきこえたまへど(とのみ殿に訴え申しなさいましたが)、限りありて別れ果てたまはむよりも(死に別れてしまいなさる以上に)、目の前に(目の前に生ある者と在りながら)、わが心とやつし捨てたまはむ御ありさまを見ては(その意志として出家して俗世の夫婦関係を捨てなさるといふ上の御姿を見るのは)、さらに片時堪ふまじくのみ(余計に片時も耐えられないとばかりに)、惜しく悲しかるべければ(殿には残念で悲しいことだったので)、

「昔より、みづからぞかかる本意深きを(昔から私自身がそうした出家の思いを深く持っていたが)、とまりてさうごうしく思されむ心苦しさに引かれつつ過ぐすを(思い止まって残されたあなたが心さびしくお思いになるだろうという心苦しさに心引かれながら過ごしているのに)、さかさまにうち捨てたまはむと思す(あなたが出家なさるといふのでは、逆にあなたが私を見捨てなさるのかと思います)」

とのみ(との一点張りで)、惜しみきこえたまふに(殿は上の出家を惜しみ申しなさるので)、げにいと頼みがたげに弱りつつ(上は自分の立場の辛さを殿に本当に分かって貰えないものと困り果てて気力を失い)、限りのさまに見えたまふ折々多かるを(もう是までかと思えなさる時々がよくあるのを)、いかさまにせむと思し惑ひつつ(しかし殿は上の出家を許すに許せず逡巡しつつ)、宮の御方にも(宮のお部屋にも)、*あからさまに渡りたまはず(すれ違いほどにもお出向きなさらず)、御琴どももすさまじくて(御楽器類も興醒めで)、皆引き籠められ(皆片付けられて)、院の内の人びとは(六条院の家政経営に携わる人びとは)、皆ある限り二条の院に集ひ参りて(主だった者が皆二条院に仕え参じて)、この院には、火を消ちたるやうにて(この六条院には火が消えたように)、ただ*女どちおはして(ただ他の女君同士がいらっしゃるばかりで)、*人ひとりの御け

はひなりけりと見ゆ(その華やぎは紫の上一人の御威勢だったのかと見えました)。 *「あからさま」は現代語と違う語用なので紛らわしい。「明ら様」ではなく「別ら様」ということらしく、だから<明白に>ではなく<別れ際ほどにも=すれ違うほどの僅かな時間さえも>ということらしい。 *「女どちおはして」は注に<尊敬語「おはす」があるので六条院の女君たちをさす。接続助詞「て」弱い逆接用法。>とある。 *「人ひとりの御けはひ」は注に<「人ひとり」は紫の上をさす。『集成』は「(六条の院のはなやかさも)紫の上お一人がいられたせいであったのだと見える」と訳す。>とある。実際には源氏殿が看病の為に二条院に移り住んだので、六条院の主だった家政人が付き従ったのだろう。

[第八段 明石女御、看護のため里下り]

女御の君も渡りたまひて(女御の君も二条院にお出向きなさって)、もろともに見たてまつり扱ひたまふ(殿と一緒に上の看病を為さいます)。

「ただにもおはしまさで(あなたは身重でいらっしゃるので)、もののけなどいと恐ろしきを(こんな病室にいらしては、もののけ憑依などがあつてはとても恐ろしいから)、早く参りたまひね(早く御所に御帰りなさいませ)」

と(と上は女御に)、苦しき御心地にも聞こえたまふ(苦しい御加減ながら申しなさいませ)。若宮の、いとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても(女御のお連れ申しなさいませ、若宮がとても可愛らしくいらっしゃるのを押し申しなさるにつけても)、いみじく泣きたまひて(上は非常にお泣きになって)、

「おとなびたまはむを(大きくお成りになるのを)、え見たてまつらずなりなむこと(押し申せなくなるだろうこと、残念に存じます)。忘れたまひなむかし(私のことはお忘れになってしまうのでしょね)」

とのたまへば(と仰ると)、女御、せきあへず悲しと思したり(女御は堪らず悲しくお思いになりました)。

「ゆゆしく(気弱な)、かくな思しそ(そんな風に思いなさいませ)。さりともけしうはものしたまはじ(そんな悪いことにお成りになりませんよ)。心によりなむ(気の持ちようで)、人はともかくもある(人は如何ともなるものです)。

*おきて広きうつはものには(故事に曰く、広い器量の者には)、幸ひもそれに従ひ(幸も多く)、狭き心ある人は(狭い器量の者には)、さるべきにて(それなりのものしかない、とあつて)、高き身となりても(いくら出世しても)、ゆたかにゆるべる方は後れ、急なる人は、久しく常ならず(足を知らずに功を急ぐ者は安泰せず)、心ぬるくなだらかなる人は、長き例なむ多かりける(ほどほどに満足して心穏やかな人は長生きする例が多いようです) *「おきて」は「於て」で<於いて=故事に於いて=曰く>という言い方、だろうか。注には<『河海抄』は「小にして焉(これ)を取れば小さく福(さいはひ)を得。大にして焉を取れば大いに福を得」(孝経、至徳要道篇の注)と指摘する。>とある。

など、仏神にも(などと殿は仏神にも御利益を願って)、*この御心ばせのありがたく(この紫の上の気立てが得難い良好さで)、*罪軽きさまを申し明らめさせたまふ(如何に善行を積んで来たかを詳しく説明申し開きなさいます)。 *「このみこころばせ」は<紫の上の性質をさす。>と注にある。 *「罪軽きさま」は<前世での罪障が軽いことを、詳しく神や仏に言明申し上げて悪病を取り除いてもらうという趣旨。>と注にある。が、出家に見合う功德を得ようとするなら、上が如何に善行を積んで来たか、を訴えたと解したい。

御修法の阿闍梨たち(御焚き上げを勤める阿闍梨たちといった)、夜居などにも(夜番などで)、近くさぶらふ限りのやむごとなき僧などは(殿の身近に仕える限られた高僧などは)、いとかく思し惑へる御けはひを聞くに(これ程までに狼狽なさる殿のご発言を聞いて)、いといみじく心苦しければ(それは非常においたわしく)、心を起こして祈りきこゆ(奮起して祈り申します)。

すこしよろしきさまに見えたまふ時、五、六日うちまぜつつ(少しお加減がよろしくお見えになる日が五、六日あるものの)、また重りわづらひたまふこと(また重い症状にお成りになる日が)、いつとなくて月日を経たまへば(いつ終わるとも無しに月日を経なさるので)、「なほ(この先)、いかにおはすべきにか(如何お成りになるのだろう)。よかるまじき御心地にや(治らないご病気ののだろうか)」と、思し嘆く(と殿は悲嘆なさいます)。

*御もののけなど言ひて出で来るもなし(上に取り付いたもののけだと言って姿を表す霊もありません)。 *「御もののけ」の「御」は<上に取り付いた>という言う意味かと思う。が、何の注釈もないし、その意を汲んだ訳文への反映も無い。却って不思議だ。

悩みたまふさま(上は苦しみなさることは)、そこはかと見えず(そう定かには見えず)、ただ日に添へて、弱りたまふさまにのみ見ゆれば(ただ日を追うごとに弱りなさるばかりに見えるので)、いともいとも悲しくいみじく思すに(殿は手の施しようもなく、本当に何とも悲しく大変なこととお思いになって)、御心の暇もなげなり(気の休まることも無さそうです)。